# 熊野町の遺跡と遺物

今回，試掘調査を実施した道上遺跡および柳ノ本遺跡は，広島県安芸郡熊野町に所在する縄文時代の遺跡である。

安芸郡熊野町は，広島市の東南方約10kmに位置している。集落の形成されている町の中心部は，標高が200m～220mであり，瀬戸内海沿岸部では特徴的な台地となっている。町の周囲には，標高400m～600mの山塊がつらなっており，町の中心部は，この山塊に取り囲まれるように盆地形を形成している。

この山塊からは盆地にむかって，いくつかの丘陵がのびている。丘陵は，山の頂きから標高約300m付近までは，急傾斜で下降してくるが，300mから下方へは，ゆるやかな傾斜となって続いている。現在までのところ熊野町域で確認された遺跡は，約60か所にのぼるが，その多くはこうした丘陵の斜面もしくは丘陵先端部の緩斜面上に立地している。

熊野町内の遺跡・遺物については，昭和57年（1982）刊行の『全国遺跡地図（広島県）』（文化庁）によると15か所の遺跡が記載されていた

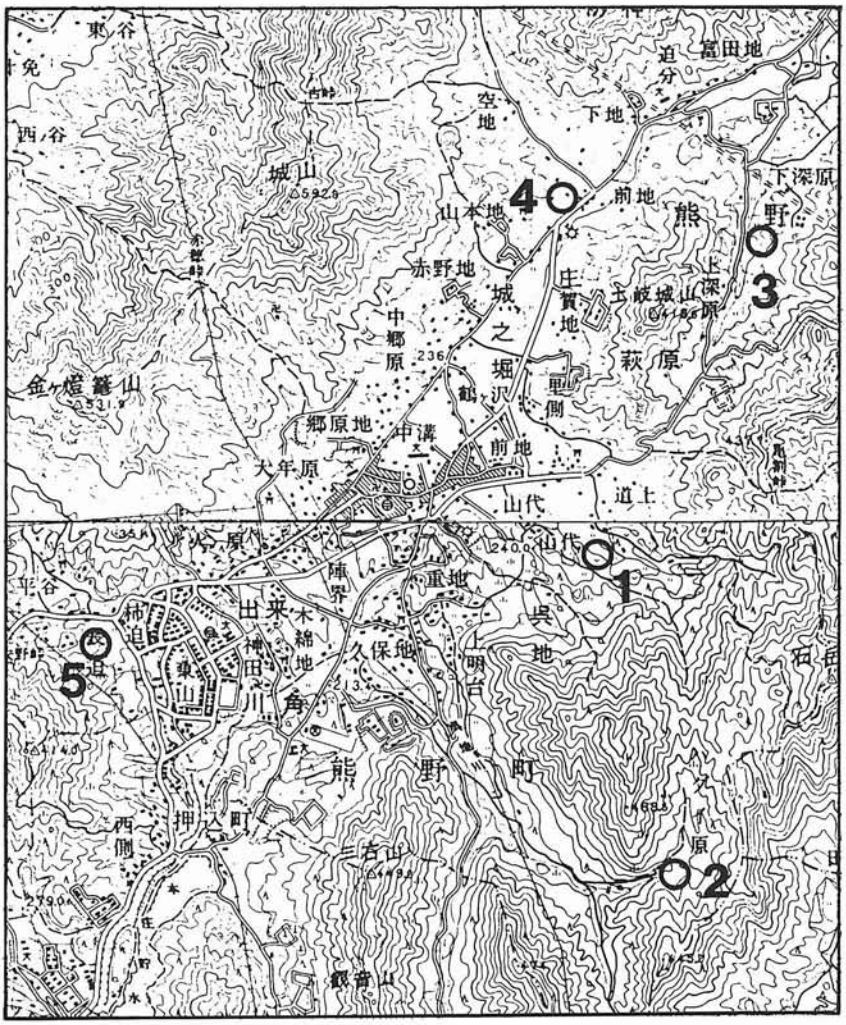



図2　熊野町内主要遺跡分布図

1.道上遺跡　　4.畦地遺跡
2.ハゲイ原遺跡　　5.柳ノ本遺跡
3.東深原遺跡

のにすぎなかったが，熊野町史編纂の計画を契機にはじまった町内の遺跡分布調査（竹ノ内哲朗氏を中心に実施）が継続的に実施されてくると，町域でつぎつぎと遺跡が発見されるようになり，現在までに約60か所の遺跡が確認されてきたのである。今後，分布調査が丹念に進められると，その実数はさらに増えてくるものと考えられる。

発見された遺跡・遺物は，大部分のものは，表面採集によるものであり，それぞれの遺跡の規模，性格，また，遺物の出土層位なども明らかではないが，時代的には，旧石器時代から近世江戸時代にいたるものまでが含まれており，熊野町の歴史を明らかにしていく上で貴重な資料となるものである。[1]

旧石器時代の遺跡としては，新宮の東深原遺跡があげられる。遺跡は，東から西へのびる丘陵の西側斜面に位置している。昭和53年ごろ，植栽のため，丘陵斜面を掘り下げたとき，地表より約50cmほど下から局部磨製石斧２点が並んだような状態で出土したといわれている。石斧は長さ14.2cmのものと16.4cmのものとがあり，いずれも流紋岩製である。両面とも縁辺部に大きな剥離痕が残っており，刃部両面から表裏両面中央部に研磨がほどこされている。局部磨製石斧は，広島県内では類例が少ないが，旧石器時代末期のものと推定される石器である。この石器の存在からみて，熊野町域で人々が生活しはじめたのは，遅くとも旧石器時代後半（15000 ～10000 年前）ごろと推定される（図3）。[2]

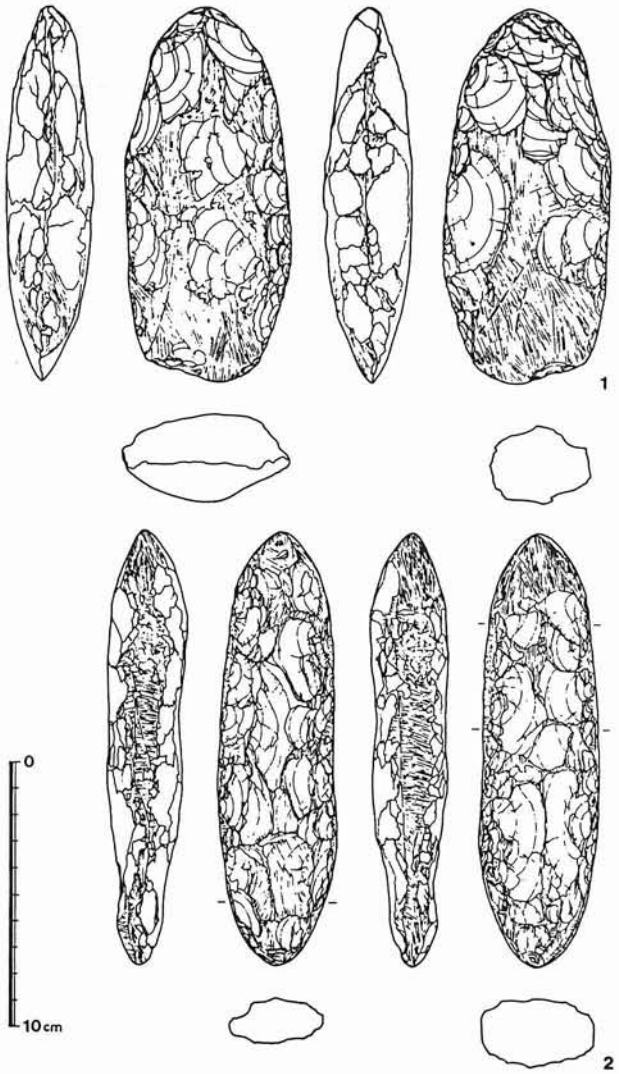
つぎの縄文時代の遺跡には，今回調査を行った道上遺跡や柳ノ本遺跡，ハグイ原遺跡，畦地遺跡，九ノ通遺跡などがある。

呉地に所在するハグイ原遺跡は，熊野町の南端にちかい呉地ダム付近に位置する。ダムの工事中に有茎尖頭器１点が採集されている。[3]　尖頭器は，先端部をわずかに欠失するが，現存の長さ8.2 cm，幅2.5 cm，厚さ0.8 cmの柳葉形をなし，断面は菱形である。基部には，短い逆刺（かえり）をもっており，両面とも細長い平行剥離調整がほどこされている。狩猟用の槍先として使われたものであろう。単独で採集されたことから，石器の作られた時期や遺跡の内容は明らかでないが，形や調整の特徴からみて縄文時代以前の旧石器時代末期ごろの石器と推定される（図4）。

初神の畦地遺跡からも尖頭器１点と石鏃１点が採集されている。尖頭器は，長さ4.0 cm，厚さ0.9 cmの水晶製で，断面は菱形をなしている。基部を二等辺三角形につくりだしていることから，ハグイ原遺跡出土の石器と同様に有茎尖頭器と考えられる。石鏃は，正三角形をなし，基部の抉りは深くつくられている。安山岩製の縦長の剥片を材料として，表裏両面とも丁寧に加工調整がなされている。石鏃の形と調整の特徴から，縄文時代早期（約8000年前ごろ）のものとおもわれる。

道上遺跡および柳ノ本遺跡については，後述する。

熊野町域の縄文時代の遺跡は，標高200 m～250 m前後の熊野盆地の縁辺で，盆地への出入口部や熊野川，二河川およびその支流の形成した沖積低地を前面にのぞむ小高い場所に位置するものが多い。こうした場所は，食料となる獣類や魚類が集まりやすく，また，狩りなどのしやすい場所であったことをよくしめしている。



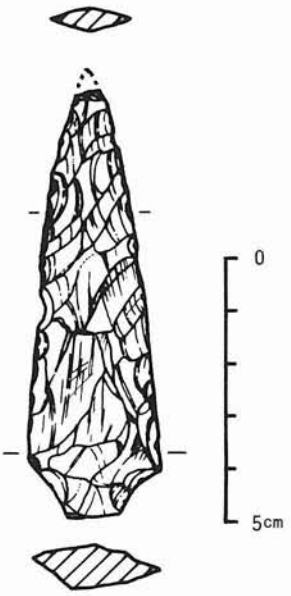




図4　ハゲイ原遺跡出土の有茎尖頭器

図3　東深原遺跡出土の石器

つぎの弥生時代の遺跡には，白石遺跡をはじめ大水南地遺跡，狐城遺跡，重地遺跡，木綿地遺跡などがある。盆地の縁辺部のほか，盆地内の低地にも遺跡が営まれるようになる。弥生時代は，わが国で米作りがはじまった時代であるが，米作りの技術の伝播とともに，人々が町域の各地に住居をかまえて米作りを中心とした生活を開始したことをあらわしている。

中溝の白石遺跡は，石風呂川左岸の丘陵南側のゆるやかな斜面に位置している。標高は約295m，低地からの高さは約50mである。弥生土器，石器，剥片，土師器などが採集されている。土器には，壺，甕がある。肩の部分に刺突文のめぐらされるものや口の端部に櫛描き沈線文のほどこされたものなどがみられる。弥生時代中ごろから後半の土器と推定される。石器では，石鏃と石錐が採集されている。安山岩製の調整の粗い石器である。米作りがはじまったとはいえ，なお，前代からの狩猟や植物の採集も重要な仕事であったことをしめしている。

大水南地遺跡は，北から南にのびる丘陵の先端部に位置している。標高は約210mで熊野川からの高さは約10mである。現在付近一帯は水田となっている。出土の土器は，壺，甕，高杯などがある。壺は，口の部分が大きくひらいて「く」の字状をなしている。頸のところには，粘土の紐がはりつけられており，その上に刻み目の刺突文がほどこされている。高杯は，脚の一部しか残っていないが，内外とも篦によって調整されている。弥生時代の中ごろから後半の土器とおもわれる。

このように，熊野町の弥生時代遺跡は，規模的にも，また，採集遺物からみても大規模なものはみられない。盆地内および盆地の縁辺の各地において，人々が生活しはじめたけれども，各遺跡での生活は，10人前後の小規模なものであったと考えられる。

つぎの古墳時代の遺跡については，熊野町ではいまのところはっきりとした遺跡はみつかっていない。しかし，町内には，何か所かの須恵器の出土地があり，また，初神の岡遺跡では，土師器がみつかっている。岡遺跡は，北から南へのびる丘陵の先端部に位置している。現在は，北側が鞍部となっており，独立した低丘陵状をなしている。以前の試掘調査によると，地山をほりこんだ竪穴や須恵器，土師器がみつかっており，付近に数軒の古墳時代の集落が存在した可能性が高いとされる。[4]

熊野町において古墳時代以降の遺跡・遺物で時代のたどれるものは，きわめて少ない。いままでのところ中世の城跡，古墓のほか，土師質土器や近世の陶磁器片の出土地が数か所しられているにすぎないが，中世の城跡，古墓などには，注目すべきものがある。

中世の城跡としては，堀之城跡，土岐城跡，嵩山城跡などがあり，古墓には，宮林古墓，海上側古墓などがある。堀之城跡は，北西から南東にのびる丘陵先端部に位置し，標高260m～270m，低地からの高さ約40mである。西側背後の丘陵尾根は，人工の堀切によって遮断されている。西端部の最も高い所にある郭（本丸）を中心に５つ以上の郭によって構成されている。本丸の東側下手には，空堀がある。以前には本丸背後に石積みの井戸も残っていたといわれているが，道路工事によって削平されいまではみられない。城の両側には，城を挟むように小さな谷が入りこんでおり天然の濠としての役割を果たしていたとおもわれる。出土遺物には，中国製の青磁片や土師質土器，備前焼甕片等がある。『芸藩通志』によると，周防国大内氏の家臣の一人であった菅田氏の居城であるとされている。室町時代中ごろに築かれたと推定される。

宮林古墓は，魁城跡のある竜王山の北側の麓部に位置している。丘陵斜面をＬ字状にカットしてつくった上・下二段の平坦部に石積みの基壇が残っている。上手の基壇は，東西約8m，南北約2m，高さ約0.4mの大きさがあり，下手の基壇は，東西約6m，南北約４m，高さ約0.3mの規模がある。基壇の中央部が一段高くなっており，二段につくられた基壇である。基壇上の構造物は，明らかでないが，周辺に五輪塔，宝篋印塔の残欠が多くみられるので，少なくとも10基ちかい五輪塔などがあったとおもわれる。基壇上より備前焼小壺と釉薬のかかった短頸壺（朝鮮製か）がみつかっている。室町時代のものと推定される。

堀之城跡および宮林古墓から採集された遺物に外国産の陶磁器や備前焼などがみられることは，これらの遺跡が通有の城跡や古墓ではなかったことをしめしているといえる。

室町時代には，山口県を本拠とした大内氏がその勢力を広島県西部地方にまで伸展させてくる。その拠点となった場所が安芸の東西条とよばれた東広島市西条町の鏡山城であった。大内氏は，瀬戸内海の海上交通を押さえ，広島湾から東西条へむかったと考えられるが，広島から西条へむかう主要なルートが熊野町を経由するルートであったと考えられる。したがって，広島から西条盆地にいたる広島県西部地域を支配するためには，この熊野地域の統括は，戦略的にきわめて重要であったといえるのである。このことから推測すると，堀之城の居城者や宮林古墓の被葬者は，安芸東西条の支配者であった大内氏の家臣団の一員であったといえそうである。

図5　海上側古墓出土の備前焼小壷

以上，熊野町の遺跡と遺物の概略を述べてきたが，古くは旧石器時代から新しくは中世・近世の遺跡まで特徴のある遺跡が存在することが明らかである。未調査の遺跡が多く，規模や性格などは必ずしも明確ではないが，分布調査の結果からみて広島県西部地方の歴史を解明する上で，重要な資料を提供している遺跡が多い。

注

(1)　ここで紹介する熊野町の遺跡・遺物については，昭和62年９月に刊行された『安芸 熊野町史』通史編によった。

(2)　ア，前掲注(1)，なお道上遺跡では竹之内氏によって細石核とみられる石器も採集されている。
イ，藤野次史「広島県佐伯郡佐伯町神宮原遺跡採集の遺物」（『旧石器考古学』43．1991）。
町史では２点とも局部磨製石斧として紹介したが，藤野氏は１点は局部磨製尖頭器として報告している。なお，図は藤野氏作成のものを使用させていただいた。

(3)　尖頭器の現物は散逸しているが，幸いにも潮見浩先生が作成された図が保管されている。潮見先生の御教示を受けた。

(4)　昭和63年ごろ住宅改築に先立って町教育委員会（調査担当は山縣元氏）により試掘調査が行われている。住居跡などの遺構は検出されなかったといわれている。